
たったひとつの木片に

風凧凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たったひとつの木片に

【コード】

N0301J

【作者名】

風凧凧

【あらすじ】

読んでも何の得にもなりませんよ？

その空色のエナメルバッグに小さな木の札を見つけたのは全くの偶然だった。

もしかしたら前からあったのかもしれないし、つけて来たのは今日が最初だったのかもしれない。朝、教室に来て友達に「おはよう」と言う習慣がやっとなついて、そしてその友達の席の近くにそのバッグがあったから。

やっぱりそれは偶然以外の何でもないと思う。

最初私はそれをそれだと思って立ち止まったのだろうか？

それが何のために使われるものなのかを知ってはいたが、それがそれであると認識してそこで首をかしげるようによく見たのかどうか、

……よく覚えていない。

小さな木札には小筆で書いたのだろう、細いけれど墨痕鮮やかに二文字の漢字が書かれていて、ああ、そういえばこいつはそうだった

よなあ、とだけ思った。

そして次にわたしはそのエナメルバッグの持ち主を大仰に首をめぐらせてさがした。

どこにいるか見当もつかなかった、というのもあるけれど、奴をふんづかまえて言いたいことがあったから。

私が奴をさがしているということを、どこからでも見ればいいと思っただから。

そんな一瞬の計算にもかかわらず、奴の姿は拍子抜けするほど近くに、前方すこし先に苦もなく見つかった。

そのバッグについているそのことを話題にしようと思って、わたしにそれは動かせないから、奴が席に帰ってくるのを数秒待った。

奴はどっかで軽い立ち話をしていたのだろう、こっちに帰ってきた。ただ奴は、ムードメーカーでもないくせにみんなから慕われている、嘘ばかりつくのになんか信じられていて、周囲に人が絶えることがなかった。だからその時も誰かに話しかけられながら歩いていて、席に戻ってもまだ話していたから、わたしが奴に話しかけることはできなかった。

奴がなぜそんなに慕われているのか、信じられているのか、理由を私は知っている。

多分知っている。そしてそれが正しければ、それはかつて、私もその恩恵を受けていたものだった。

私もかつてそれを笠に着て行動させてもらっていた。

けれど私にはそれに比例する人望というか、愛想というか、カリスマ性というか、それを活かしかれるだけのものが致命的に欠けていたから、そこに到達することは終にできなかった。それを利用するとか活かすとかいうことは全く考えたこともなくて、自分の知らないうちに周囲の人間に見限られていたかもしれないと思うと悔しくて悔しくてならない。何も知らずにしゃばっていたその頃の自分を殴りとばすことができたらどんなにいいかと思った。

そつという視点でいくとなるほど、奴には協調性がある。

格好良く見える程度のほどよい孤立感がある。

ムードメーカーの近くにいつもいるような重石役としてうってつけだ。冷静沈着、頭脳明晰、さぞや女子うけも男子うけもよいのだろう。

「盲目の愛は絶対の憎悪と同じだ」とは誰が言ったことだったろう。同じということならどっちかがどっちかに変わり果てる相互交通があってもいいだろう。私の恋はいつも憎悪に似たものになしか発展しない。

それでも今の社会はまだ、男が女にコンプレックスを持つよりその逆の方がまだマシとされているから、「女は嫉妬深い」というレッテルを貼られて私たちは耐えて生きる運命にあるのだろうかと思う。

「やまとなでしこが良いとされる時代は終わった」とも誰かが言っていた。

本当にそうならばいいと思う。

恋愛沙汰には出口が無いようにしか子供には見えない。

何をしても人は擦れ違えばかりにしか見えない。

誤解に誤解を重ねたならそこまで行けるのかもしれない。

手にチョコを握り締めたまま人を待つ自分に酔っていたずらに胸を高鳴らせているのもうごめんだ。

椅子をひき出す音が教室の床と不協和音をたてる。

いろいろな音だ。

二度と聞きたくない音だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0301j/>

たったひとつの木片に

2010年10月17日06時31分発行